

ホトトギス

昭和二十三年四月二十八日 編輯者 特別編輯 渡辺 武二 七号
昭和二十三年四月一日 発行 二第百二十四巻 第四号

ホトトギス

四月号



風雅の小筥（三十九）

廣太郎

この稿を認めているのは令和三年一月二十日で、丁度二十四節気の大寒であり、アメリカでは大統領が新しく誕生する。まだまだ新型コロナウイルスの収束は遠いようだが、丁度百年程前には所謂スペイン風邪というウイルスが世界的に多くの感染者、死者を出したという記録もあり、日本では大正七、八年頃になるといふ事で、ホトトギス社にあるその当時のホトトギスを繙いたところ、大正八年新年号に、ウイルスの話ではなく、本誌の付録として、本文中ではあるが「写生を目的とする季寄せ」と題するページがあり、解説は無く、季題と例句が四十ページに渡って掲載されていた。虚子編の『新歳時記』が昭和九年に発行された事を考えると、それより十五年近くも以前になる。その「序」の一部にちよつと興味を惹かれた。暦はすべて太陽暦を用ゐた。季題を全然太陽暦にし度いといふ希望は誰にもあり乍ら、過渡期のかなしさに其を断行する勇氣を皆欠いてゐた。此季寄せは其を敢行した。自然無理も伴つてゐる。併し其無理から生ずる欠陥よりも敢行したところから享くる利益の方が遥に多いことを確信する。

とあり、新暦と旧暦の問題は俳句の上でも多くあつたのだらう。私自身最近旧暦と新暦を対比させたカレンダーを愛用しているが、俳句の事に限らず対比させると面白い。ちなみにこれを書いて一月二十日は旧暦では十二月八日、未だ年は明けておらず、かの赤穂浪士の討ち入りも六日後の一月二十六日なのである。

旬日記 汀子

令和二年四月四日 芦屋ホトギス会

春昼の人通りなき街となる

花かくに盛りといへど人淋し
取り止めし花の旅とて名残あり

四月五日 下萌句会

咲き満ちし花に祈りの深かりし
春の蚊に明け渡したる庭の木々

エープリルフルに托す心はも

あるがまま過ぎて迎へし桜かな

世を怖れ神にゆだねし桜かな
「文藝春秋」への依頼寄稿

取束の期待は切に春の風邪
病む人へ祈り届けん夏近し

薫風の渡る地球の果までも
神みそなはせたまへとて風薫る

試験とは越えてこそ見え来る夏
四月六日 ロイヤル俳壇

かく花の盛りといふに病む人よ
朝寝などしてはをられぬ身となりぬ
人も又蝶の如くに飛びたしと
さあみんな元氣を出さう蝶となり

四月十四日 綿業倶楽部

桜ほど心に添はぬ心とも
広々と渡る風あり葱坊主
家裏に残る畑あり葱坊主

留守の戸に忘れ置かれし葱坊主
届きたる今宵のための桜鯛

四月十五日夏潮句会

野遊の心抱きてゐる家居
みよし野の花の心を贈られし

みよし野の花の消息届く朝
こんな日もあると野遊心もて

あきらめし吉野の花の宿便り
届きたる花の吉野の心かな

せめてお茶淹れて吉野の花のこと
出句 大阪倶楽部

春眠に委ねたるより旅疲れ
深吉野の桜如何にと思ふのみ
みほとりの桜に偲ぶ一日かな
出句 時雨句会

旅予定消さねばならぬしやぼん玉
人一人居らぬも景色春の海

四月二十四日 アネモネ句会

菜種梅雨とは言へざるも曇り来し
朝寝などしてはをられぬ電話来し
世を怖れつつも朝寝をしてをりぬ

葱坊主には素通りす風のあり
葱夜や一人暮しといふ自由

出句 きざらぎ会

取り止めの会惜しみ春深きこと
朧月いつもの帰路を仰ぎつつ

出句 無名会

案外に朝寝の出来ぬ一人住
朝寝など勿体なくて出来ぬかな

廣太郎句帳

廣太郎

令和二年四月四日 野分会片屋例会

麦 鶉 鳴いて稜線撫でゆけり
桜 湯に宴の楚々と始まれり

四月九日 土筆会不在投句新型コロナウイルスによる

緊急事態宣言を受けてこの月より句会激減

春 深し何時まで続くこの災禍
若 芝の輝く園に人居らず
百 千鳥希望の楽として聞けば
若 芝に雨も彩り加へたる

四月十六日 北國文芸選者吟

セレナーデ奏でる如く麦鶉

四月十七日 廣邦会

大 江戸に広ぐる園や朧月

コンサートホール無人の朧影
木 洩日に味明かしゆく山葵沢
四月二十六日 野分会東京例会

夕 星を引つ張り出して麦鶉
桜 湯や来賓控室の黙
天 敵は村のピストロ麦鶉
桜 漬開き二人の門出かな

四月二十八日 若水句会不在投句

緑 立つ宇宙の涯を知りたくて
遠 蛙君を送りしレクイエム
風 光る中に災ひ閉ぢ込めて
若 緑明日を支へてをりにけり
初 蛙鳴けば田園シンフォニー

小 面の喜怒哀楽に風光る

里 帰り叶ふ日は何時夕蛙

四月二十八日 カトリック新聞選者吟

春 深し全ては神の御心に

雑詠 廣太郎 選

若き日の学舎のあと草紅葉 長岡 安原 葉

洛北の空は紺碧冬紅葉 同 同

空低く来る洛北の時雨雲 同 同

令和てふ元号親し去年今年 東京 今井千鶴子

一人住むことに馴れつつ去年今年 同 同

伸びし髪もて余しをり去年今年 同 同

猪鍋に文豪談義里の宿 神戸 和田華凜

猪鍋や酒は小鼓丹波住み 同 同

極堂も子規も若かりおでん酒 同 同

病棟に働く人に聖夜来る 同 藤井啓子

黒革の聖書の重み降誕祭 同 同

日向ぼこ猫の言葉が分かり出す 同 同

夕時雨ちりばめ銀座大通り 東京 田丸千種

対岸は堅田あたりか片時雨 同 同

しぐるるや癖つ毛にくせ立ち上る 同 同

二人来て散らしてしまふ鴨五十 福知山 宮本幸子

吾等のみこの静けさの中の鴨 同 同

鴨達にしじま返して帰りけり 同 同

己が曳く水尾足し鴨の鴨に蹤く 香川 湯川 雅

綿虫や空に浮沈といふ迷路 同 同

向直ること足下にも冬近し 同 同

満月となりて地球の横に浮く 相模原 木村享史

月は友マスク外して仰ぐかな 同 同

清らかな月よ地球は汚されて 同 同

遠き日と背中合せの日向ぼこ 龍ヶ崎 今橋眞理子

落日に黒く暮れゆく木の葉かな 同 同

直線でつながる星座冬に入る 同 同

種茄子に火星最接近の夜 渋川 木暮陶句郎

轆轤挽くそこに銀河のはじまるか 同 同

更待の月歪ませて窯火燃ゆ 同 同

秋惜むかにふりそそぐ日差かな 袋井 湖東紀子

忙しげに動くは栗鼠の冬支度 同 同

雲一つなき一天は鷹のもの 同 同

洩らしたる木の息づかひ帰り花 高松 永森ケイ子

帰り花見つけてくる人待ちし 同 同

太陽の選びたる木の帰り花 同 同

空滑り水面傾げて白鳥来 神戸 涌羅由美

白鳥の翼にたたむ夕茜 同 同

白鳥の眠れる影のやはらかに 同 同

東京やうすにぐりをる桜の夜 東京 今井肖子

春の雨何見るといふこともなく 同 同

きつとまたきつと桜の輝かむ 同 同

雑詠句評 (三月号より)

葱は青味噌は白てふ京女 奈良 古賀しぐれ

新酒の香 供へ忌心 静心 福知山 松山牧子

私事で言えば、青葱はすき焼きのとき、白味噌はお雑煮のとき。それ以外は、白葱と、普通の味噌で暮らしている。若干のルーツを西に持って、関東で育つとそんな感じになる。すき焼きも雑煮も冬の食べ物、京の響きは日本古来の習わしの残る正月への接近でもある。返って掲句。東から見れば漠然と西の近畿内での、互いの印象は俄かには知れないけれど、「てふ」という大まかな括り方にやっかみ半分の憧憬のようなものも見て取れる。島国が最も華やぎ、最もややこしい年が詰まるころである。(敦子)

食文化というものは、関東と関西でかなり好みが違うようだ。特に関西の人は関東の白い葱、あの根深をあまり好まない。反対に関東の人は京都の西京味噌はあまり馴染めないようだ。東京で暮らしている筆者ではあるが、やはり食の好みは関西風で、この句には共感が持てる。(廣太郎)

松山ひとしさんは今年の八月に亡くなられた。いつも、お二人お揃いで参加されていた全国各地の句会のご様子や、懇親会で、にこやかに談笑され、静かに酒を嗜んでおられたご様子が懐かしく想い起こされる。

その、ひとしさんの御霊前にお供えされた新酒の香に、ありし日を偲んでおられる心情、ご心痛の深さが忌心、静心の措辞に窺われる。(とほ歩)

ひよつとすると御主人様の事かも知れないが、生前お酒の好きだった人への供物として新酒を供えている。ご自身もお相伴に預りながら、注がれた新酒を仏壇に供えると、ふと新酒ならではの香りが漂ってきたのである。その香りを愛でながら故人を偲んでおられる姿が神々しい。(廣太郎)

天地有情

日子選

背鷺の一步より時動き初む
 マーラーの五番短夜司り
 富士伊吹見えずともよし秋の雨
 露寒の被災野宿も一と昔
 春も夏も秋も無かりし去年今年
 子規は居士虚子は先生去年今年
 千五百号目前の子規犯る
 夜なべして直せし稿にまだ不満
 冬暖に狎れまじくして狎れにけり
 冬ぬくきことが思ひ出なりし旅
 花石路に人語いよいよ美しき
 母逝きて使はぬ茶室石路の花
 小春日や旅恋ふ心ありながら
 空にあるよりも大きく朴落葉
 久闊や何から話そ小六月
 水仙の芽の青々と句碑の裾
 一枚のマロニエ落葉さへ掃かれ
 冬耕の人の影呑む山の影

東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 三村純也
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 鎌倉 星野 椿
 同
 西宮 本郷桂子
 同

八日月かかげし峡の初しぐれ
 峡の空十一月の風が研ぎ
 俯いてこらへぬるらし初笑
 冬の日の頭を垂れてゐる如し
 冬ぬくし土やはらかき杖の先
 冬めくや少し痩せたる妻の肩
 茶の花や白の上に黄をずしりと
 初しぐれ一日一日を大切に
 冬滝の衰へ見せぬ飛沫かな
 夜半句碑聖地めきたる冬の滝
 うつすらとまほらの里の冬霞
 ふと父の墓を訪ねて冬の月
 枯萩や水音もまた枯れてをり
 枯萩を刈り春秋をたたむ庭
 白鳥の来てその湖の母となる
 茎の石京に百年てふ重み
 日を溜めて父の微睡む障子の間
 母に問ふ障子明りの仏間かな

東京 山田閨子
 同
 津 中杉隆世
 同
 神戸 浜崎素粒子
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 宇治 西村やすし
 同
 大阪 酒井湧水
 同
 宝塚 水田むつみ
 同
 神戸 和田華凜
 同
 淡路島 木下圭子
 同